

The Language Labyrinth

Chapter 3: The Trial of Choice

Kuon entered the next room and immediately noticed the difference. It was not dark. Instead, it was filled with a warm, golden light, as if the sun filtered through glass. The floor was polished stone, smooth as water, and three identical doors stood ahead of him, each without labels or numbers.

A voice echoed, familiar yet somehow heavier:

“Only one path leads where you must go. But all paths lead somewhere.”

Kuon stood still. He felt no threat, no riddle to solve—only a question unspoken. Choice.

He approached the center of the room where a pedestal stood. On it lay three cards, facedown. A message above them read:

“Flip only one. Choose carefully. You will not return.”

He stared at the cards. They were identical—no markings, no hints. Logic could not help him here.

He remembered something his father once said:

“The hardest choices are not between good and evil, but between two goods—or two unknowns.”

His hand hovered over the middle card. He hesitated. What if this led to safety? Or to stagnation? What if the one on the left brought pain, but also growth?

He felt a whisper inside him—not from the room, but from his own thoughts.

‘There is no correct answer. Only consequences.’

Suddenly, a memory surfaced. In school, they had studied a poem:

Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both...

He smiled. That poem had always left him unsettled. Now he understood why. Choice meant sacrifice.

He stepped back, closed his eyes, and let his breathing slow.

‘If I must live with this choice,’ he thought, ‘then let me own it.’

He reached out and flipped the rightmost card.

On its face, a single line appeared: You have chosen what you were not ready for.

The door beside it opened slowly, revealing a corridor cloaked in shadow.

He felt his heartbeat quicken—but did not move back. Instead, he stepped forward.

Behind him, the voice returned, softer this time:

“Not all who wander are lost. But not all who choose are ready.”

As he crossed the threshold, the golden light vanished, and cool darkness embraced him.

Somewhere in that silence, he heard his own voice whisper:

“I will learn. Even from this.”

1. この章の部屋の雰囲気描写として最も適切なものはどれか？

- A. 冷たく、恐怖を誘う空間
- B. 知的好奇心を刺激する図書館風の空間
- C. 暖かく静謐だが、不安の余白を残した空間
- D. 激しい光と音が交差する混沌とした空間

2. 以下のうち、音声のメッセージとして正しいものはどれか？

- A. 「すべての扉は戻ることを許さない」
- B. 「正しい選択はただ一つ、だがどの道にも意味がある」
- C. 「選んだ扉は君の運命を決める」
- D. 「すべての選択は正しい」

3. Kuon がカードを前にして直面したのは、どのような葛藤か？

- A. 善と悪の選択
- B. 複数の正解とその重みの選択
- C. 絶対的な正解の特定
- D. 他人の命を左右する判断

4. 以下の一節は何を象徴しているか？

"There is no correct answer. Only consequences."

- A. 道徳的判断の絶対性
- B. 選択には必ず正解が存在するという信念
- C. 意思決定がもたらす不可避な結果への覚悟
- D. 運命に従うことの消極性

5. 本文に引用された詩の冒頭部分（Two roads diverged in a yellow wood...）の役割として最も適切なものは？

- A. 文学的雰囲気を加える装飾
- B. Kuon が道に迷っていることの比喻
- C. 選択における「取り返しのつかない分岐」を強調するための引用
- D. 詩的リズムによる緊張の緩和

6. 次の英文に最も近い構文を選べ：

"If I must live with this choice, then let me own it."

- A. 仮定法過去
- B. 仮定法現在
- C. 命令形を含む条件構文
- D. 省略された倒置文

7. “You have chosen what you were not ready for.” という文の文法構造はどれか？

- A. 関係副詞の非制限用法
- B. 間接疑問文の埋め込み
- C. 関係代名詞 **what** による名詞節構文
- D. 仮定法過去完了

8. 次のメッセージの文体技法は何か？

“Not all who wander are lost. But not all who choose are ready.”

- A. 対比と省略による強調表現
- B. 因果関係と過去完了の反復
- C. 誇張法と反語の併用
- D. 比喩と倒置構文の重複

9. Kuon が右のカードを選んだ後に出現した文 (You have chosen what you were not ready for.) が示唆するテーマとして最も適切なものは？

- A. 間違った選択による敗北
- B. 準備不足でも経験は価値を生むという学習的姿勢
- C. 選択を後悔すべきであるという警告
- D. 判断ミスを正すためのヒント

10. この章に込められた中心的メッセージとして最も近いものはどれか？

- A. 論理よりも直感が正しい選択を導く
- B. どんな選択でも成長と学びがある
- C. 選ばなかった道には後悔しか残らない
- D. 選択しない自由こそが最良の選択である

<解答・解説>

1. C 本文では「warm, golden light」「smooth as water」とあるが、「only a question unspoken」などによって心理的な“静かな緊張感”が描写されている。
2. B 原文にある "Only one path leads where you must go. But all paths lead somewhere." をそのまま意識した選択肢。
3. B 本章の核心は「どれも行けるが、どれかしか選べない」＝優劣ではなく価値の違い複数選択肢との葛藤。
4. C “No correct answer. Only consequences.” は、「正解探し」ではなく「責任を引き受ける覚悟」のメッセージ。
5. C ロバート・フロストの詩の引用は、まさに「片方を選ぶともう一方には戻れない」選択の重みを象徴。
6. C “If I must live with this choice, then let me own it.” は条件節＋命令文 という構造。
7. C “what you were not ready for” は名詞節（～なもの）を構成する関係代名詞 "what" による表現。
8. A “Not all who wander are lost. But not all who choose are ready.”
→ 前後で構造を対応させつつ、主語・動詞などの省略でリズムと印象を強調。
9. B 結果として「未熟な選択」であっても、クオンは “I will learn. Even from this.” と前向きに受け止めている。
10. B 本章では「正解か否か」でなく、「選び、進んだその先で学ぶ」姿勢がメッセージの核となっている。

<文法ポイント解説>

① 仮定法現在 + 命令形 (If 節)

“If I must live with this choice, then let me own it.”

If 節は助動詞 "must" を含む現実的仮定、主節では命令形を用いた少し珍しい構造。

→ 条件節 + 命令形 の構文強調型。

② 関係代名詞 what による名詞節

“You have chosen what you were not ready for.”

"what" = 「～なもの」 = 関係代名詞 + 先行詞が一体化した構造（名詞節を形成）。

→ 目的語節（～なもの）として従属

③ 文体技法：対比構文 + 省略

“Not all who wander are lost. But not all who choose are ready.”

"Not all who..." の対比構文で、**並列構文 + 一部省略（be 動詞や主語）**を用いた強調表現。文学・哲学的引用に多いスタイル。

④ 暗喩・比喩表現（Metaphor）

“Choice meant sacrifice.”

“choice” に “sacrifice” を直接等号で結ぶことで、意味上の飛躍を含んだ**暗喩（metaphor）**の典型。短く深く印象に残る表現。

⑤ 詩の引用による間接的言及

“Two roads diverged in a yellow wood...”

ロバート・フロストの詩『The Road Not Taken』からの引用。明確な出典が示されておらず、**間接引用（allusion）**の技法となる。

<全訳>

クオンが次の部屋に入った瞬間、それまでの部屋との違いに気づいた。

そこは暗くなかった。

代わりに、まるでガラス越しに差し込む太陽のような、暖かい黄金の光に満ちていた。

床は水面のように滑らかな磨かれた石で、彼の正面には3つの同じ扉が並んでいた。どれにもラベルも数字もなかった。

声が響いた。どこかで聞いたような声だが、今回は重みがあった。

「一つの道だけが、お前の進むべき場所へ導く。だがすべての道には行き先がある。」

クオンは立ち尽くした。脅威もなければ、謎もない。ただ、沈黙のなかに問いがあった。

一選択。

部屋の中央には台座があり、その上に 3 枚のカードが裏向きで置かれていた。

その上に書かれていたのは：

「一枚だけをめくれ。慎重に選べ。戻ることはできない。」

彼はカードを見つめた。すべて同じで、目印も手がかりもなかった。

ここでは論理が役に立たない。

彼は父の言葉を思い出した。

「最も難しい選択とは、善と悪の間ではなく、“善と別の善”あるいは“未知と未知”の間だ。」

彼の手が中央のカードに触れかける。

「これが安全かもしれない。あるいは、何も変わらない道かもしれない。左のカードは…痛みを伴うかもしれない。だが、それが成長に繋がるかも…？」

彼は自分の中にある囁きを感じた。それは部屋からではなく、自分の思考そのものから聞こえていた。

「正解などない。ただ、結果だけがある。」

突然、記憶がよみがえった。学校で学んだ詩。

「黄色い森に分かれた二本の道…私はその両方を行けなかった…」

彼は微笑んだ。その詩がいつもモヤモヤした理由が今なら分かる。

選択とは、何かを捨てることだった。

彼は一歩下がり、目を閉じ、呼吸を整えた。

「この選択と生きていくのなら…責任を持とう。」

右端のカードをめくった。

そこには、たった一行の言葉が書かれていた。

「あなたは、“まだ備わっていないもの”を選びました。」

すぐ横の扉がゆっくりと開いた。影に包まれた通路がそこにあった。

彼の心臓が高鳴った。だが、もう引き返すことはなかった。

一歩前へ踏み出した。

背後から再び声が響く。今度は、ずっと柔らかく：

「さまよう者が全員迷っているわけではない。だが、選ぶ者が全員“準備できている”わけでもない。」

彼がその敷居を越えると、黄金の光は消え、ひんやりとした暗闇が彼を包んだ。

その沈黙の中、彼自身の声がどこからか聞こえた。

「これも、きっと学びになる。」